

狼は人を襲うか

高橋正男（仏和動物用語用法辞典編纂中）

これは私が長年抱いていた疑問である。「狼が人を襲うなどとは絶対（滅多に）にありません。狂犬病に罹ったものや、不意に出会った場合他特別の状況を除いて」と狼の研究者や愛好家は答える。フランスの今は亡き著名な動物ライターは狼は人を襲わないと主張し、「狼がたくさんいた中世のジェヴォーダンの森の中に赤子を置くより、狼のいない現代のパリのブローニュの森の中に赤子を置き去りする方がよほど恐ろしい」と言っている。それほど狼は人間を襲ったりしないと聞いたかっただろう。フランスの狼研究者で自ら数百頭の狼を飼育した故ジェラルド・メナトリー氏は、「狼は縦に長いものを恐れる」と言う。つまり「狼は人間を恐れる」ということを意味する。このことは私が北海道の狼飼育・研究家の桑原氏を尋ねた時に実際に体験した。獣舎に近づいた途端に、狼たちは恐慌を起し、異常なほどの勢いで檻の中の小屋の屋根に飛び乗ったり、物陰に隠れるなど、尋常ではなかった。背を屈めると、落ち着きを取り戻した。身を低くすれば近くに寄っても静かにしていた。メナトリー氏は、自らの体験を根拠として、「狼は縦に長い人間を襲わない」と聞いたかっただと思う。それでは、実際には起こりえないことであるが、キリンやダチョウなどに対しても恐れるのだろうか。犬の研究者によると、自分の目線より高い物には警戒するという。ところで、メナトリー氏が自分のご子息で行なった

実験がある。狼のいる広大な囲いの周りを駆けさせた。狼は遊びの気分で子どもたちを追いかけた。突然彼は子どもたちに「伏せろ！」と命じた。子どもたちがばたっと倒れると狼たちは恐ろしい形相で子どもたちに殺到した。もちろん金網に遮られているが、囲いの中でこの実験をしたらどうなるのか。彼は狼は時には人を襲うと思っていたのではないのか。彼の知人で何時も馬に乗り、狼を連れて散歩する男がいた。彼は友人に狼を連れての騎馬散歩を「止めたほうがよい」と忠告した。ある日男は騎馬散歩中に自分の真新しいマントをわざと落とす。狼はマントに飛びかかりずたずたに破ってしまった。友人は狼を直ちに処分したという。犬の研究者がこの話をしたところ、「犬は獲物として持ち去ろうとするだろう」と言う。野生の狼だったらどうだろう。捕食動物は動くものには興味をもち、急に動いたり、倒れたりするものには飛びかかる本能がある。狼も例にもれない。その狼は瞬間的に獲物と思ったのではないだろうか。日本とフランスにも「後をつけてくる狼の前で急に走ったり、転んだりしてはならない」という民間伝承がある。民間伝承のなかには真実が隠されている。フランスでは昔から家畜を巡っての狼と人間の戦いは壮絶を極めた。中世は特に被害が多かった。狼は同国のほぼ全土に棲息していたが、狼に関する防衛対策として、銃器を初め、虎挟み、口発破、輪差、落とし穴、毒薬その他様々な方



狂犬病の狼、村人を襲う

法が全国的に行なわれていた。さらに効果はないにしても狼祓いの色々なまじないや呪文も唱えたりした。農民は銃器の所有を禁じられていたので、多くの被害が出ると、自治体は大小様々な規模の巻き狩りを行なった。狼の被害は農村だけでなく都市部にも及んだから、国中の問題だった。それに加えて中央政府による国内外を相手とする戦争や内乱が、次から次と起こったので、市民や農民の生活は疲弊の一途を辿った。その間、狼への対策はなおざりにされたので、狼の被害は増大した。行政は賞金をかけて狼退治を奨励したが、賞金を増やせば成果が現れるが、国の財政は苦しくなり、賞金を減らせば成果はがた落ちになるというイタチごっこだった。戦乱が起こると、死者や負傷者は戦場に放置された。すると狼どもが死んだ兵士やまだ息をしている者をも貪り食った。さらに腐肉をも食った。ペストが流行ると収容する場所もなく、死者はもちろん重病人も森や町外れに捨てた。そのため狼どもはまだ生きている人間を食べ、人食い狼になった。このような状態だったから、狼の存在は市民生活に重くのしかかり、無視しがたいものとなっていた。こうして狼へ恐怖がやがて民心のなかにギリシア時代の狼人間を蘇らせ、新しい狼人間とか狼つきなどの狼伝説やキリストに桶突く悪魔、その手下の魔女伝説を生んだ。中世の頃は町外れから深い森が隣町まで続き、昼なお暗い森には恐ろしい狼や狼使い、盗賊やその他魍魎魅魍魎が跋扈していた。そのため先を急ぐ旅人や森を横切らなくてはならない人々のために森の入口に聖人像や十字架が立てられた。旅人は十字架に旅の安全を祈った。フランスの歴史の中に狼の果たした役割は良くも悪しくも無視できないものがあると私は思っているので、正史の中に一章を割くべきであると考えている。

ところでメナトリー氏は、野生の狼と 飼育下の狼とは性格が異なることを強調している。たとえば、野生の狼は子どものいる巣穴に人間が近づくと、子どもを放置して逃げ、近くで隠れて見守っている。人間がしつこく巣穴の入口近くにい続けると子どもも巣も放棄してしまうという。しかし飼育下の雌狼は馴れた人間でも巣穴に近づくと威嚇し跳びかかることもあるという。そうでなくても威嚇しながら辺りをうろつき、人間が去るのを辛抱強く待っている。もちろん個体や接した人にもよるのだろうが。ポーランドで聞いた話であるが、ある大学付属の狼研究所で、囲いの中で研究用に飼育中の狼が、見学に来た人たちの一人に激しく襲いかかった。研究員たちが必死になって制止してことなきを得たという。この人は黒人女性で、狼が人種差別をしたわけではなく、「胸にかけた揺れていたカメラに反応したか、女性の体臭に反応したのではないか」とフランスの狼研究家は言っている。この話に似たとをドイツの狼研究家も語っている。

この攻撃性の変化は狭い囲いの中での飼育による

ものだろう。こういう点が人間に全てを、あるいは一部を依存してしまった狼、あるいはペット化されてしまった狼と野生の狼との大きな違いであろう。だから狭いところに閉じ込められた狼を研究しても野生の狼を知ったことにはならないと思う。

多くの狼研究者たちは実際に野生の狼を追いかけその生態や行動を知るわけではない。狼のような人の前に姿を現すことを避ける動物を観察するためには信じられないほどの時間と忍耐と偶然やってくる幸運の他にも経済の裏付けを必要とする。実際にはこのような条件の揃っている人は極めて少ないだろう。多くの人はこうした経験から書かれた書物から得た知識と自らの短期間のフィールドワークや動物園での観察と映像などから得た知識に依存しているのが実状ではないだろうか。メナトリー氏はこのような実情にある研究者に彼の関係する広大なジェヴォーダン狼公園の付属研究フィールドで半野生の狼を観察することを勧めている。この公園では二・三日に一度大型草食動物の骨つき肉を十分に与えるだけ、あとは残った骨や汚れ物を片づける以外は一切干渉しない。したがってその年に子どもが何頭生まれたか、現在何頭いるのか正確には分からない。ここにはヨーロッパからたくさんの方が来て来る。その中には科目の実習単位の取得のために狼を研究する大学生もいる。アルプスの国立公園で会った女子学生もこのこと狼公園に半年ずつ滞在して実習していたという。英国の大学の学生のグループといっしょになったことがあったが、彼らはフランスの動物公園を巡って単位を取得すると言っていた。

私はこの公園を六度訪問したが、ある年の九月などは狼が一度も姿を現さない。昼間は森の中に入っていて夕方にならないと出て来ないという。園長のマリさんは疲れていて、「一人で森の中に行つてらっしゃい」と言うので、恐る恐る入って行った。松やその他の植物の草いきれに混じって、微かに獣の匂いがする。その時たくさん狼に見つめられているような気がして、先に進むことはできなかつた。本来なら余所者をナワバリに入ることは許さないという狼たちは思っているに違いないと考えながら、しばらくじっとしていた。日頃人には「狼は人間を襲うことはない」と言っていたのに何という体たらく、恐ろしくなってそのまま引き返した。元々野生動物や大きな動物に馴染んでいない臆病な私だった。本物の狼好きの人に聞くと狼でも大きな犬に対しても平気であるという。私はそうはいかない。向こうから大きな犬が来ると鎖に繋がれていればよいが、放たれていると脚がすくんでしまう。それは小学生の頃、ジャーマンシェパードに追いかけれ、怪我はなかったものの、噛まれて怖いという思いをしたからだった。こうした経験があったからかもしれないが、六冊の狼の本を翻訳してみて、狼が人間を襲わないと言い切れないと思うようになった。と言うのは、私は人間と狼との昔からの関わり方の歴史に興味をもっているが、その中には狼の人間への攻撃や



人食いの話がたくさん出てくる。これを皆さんがどう否定しようが自由であるが、私も襲撃の現場に立ち会ったわけではなく、書物その他による知識に過ぎないから断言する立場にはないが、その中に真実らしきものを感じることもある。ということは「狼は場合によっては人間を襲うことがある」ということである。私には「狼は人間を絶対（滅多に）襲わない」ということはありえないと思うようになった。ナポレオンのロシアからの敗退に際し、敗残兵の後から群狼が付きまとい、脱落した兵士を喰り食ったという話は歴史書にはでてこないが有名な話である。先に書いた戦場の戦死者やベストの死者の例もある。狼の嗅覚は鋭い。血の匂い、腐肉の匂いには敏感である。「古い話もちだして」とおっしゃるなかれ。狼の食性は昔も今も変わってはいない。「狼は腐肉を食わない」と言う人がいる。そんなことはない。狼は状況次第で死んだ仲間の腐肉を食っているところを目撃されている。飼育下の狼が我が子を食べ、仲間まで食う事実が知られている。私は「狼は人間を食わない」ことを信じ、そう言ってきた。ところが数年前、インドのある州でたくさんの農民の子どもが狼に浚われるという事件が起こった。一九九六年に『大型肉食獣と人類の共存』という国際シンポジウムが埼玉県であった。インドの研究者が事件を発表し、出席していた諸外国の研究者たちを驚かせた。彼らは、事件の背景や状況などを発表者に問い質したが、証拠の写真などを見せられて、狼に相違ないことを認めた。しかしこの事件は、狼の餌がないことと貧しい農民の特殊事情であるとして処理された。（このことは学会誌に載せられたそうであるが、私はみていない）この場合の「特殊事情」とは何かを整理してみると

- ・ 狼の棲息場所（なわばり）に餌がない。
- ・ なわばり内の人家に餌となる家畜がない。
- ・ こうして飢えた狼は人間を襲った。

これが「特殊事情」なら、いくらでも起こりそうである。私なりに捕食動物が人間を襲う恐れのある「特殊事情」を考えてみた。

- ① 『何らかの事情（いじめや病気や怪我など）で、群れと行動ができなくなり、餌にありつかなかった場合』：群れの秩序は厳しく、特に最下位の個体は徹底的な苛めの対象になりやすい。例の狼公園で二日続けて血にまみれた二頭の狼が仲間に殺されているのを見た。動物園では逃げる場所がないので追い詰められて、大怪我をするか殺されてしまう。野生では逃げられるが、狭い囲いのなかでは哀れな結末が待っている。狼は群れを離れては生きられない。こんな状態になったときの狼は、元の群れの後について行き群れの食い残しを食べながら、体調を回復しつつ、群れが再び受け入れるのを待つ。しかし多くは自ら捕食できず餓死するか、他の捕食獣の餌になるか、または、それ以前に捕りやすい人間を襲うかもしれない。ライオンやトラやヒ

ョウなどで知られている。まれには他の群れに受け入れられることもあるらしい。野生動物の場合、社会生活をするといっても、人間からみれば非情なもので、狼では親子の愛情、兄弟愛と言ってもいつまで続くわけではない。多くの場合、若くして親から追われ、兄弟との接触もなく、新しい伴侶と新家庭を築くことになる。ここで忘れてはならないのは、厳格な階級性である。親子社会の狼では両親がボスであり、絶対的に子どもたちを支配する。これだけなら彼らの社会は平穏なものだ。子どもたちの中にも強弱による上下関係が生まれる。そして何かの事故でボスが弱くなったり、死亡することがあれば、子どもの中から、ボスの座を激しい闘争の末に勝ち取る者が現れ、新しいボスになる。また、逞しい放浪者（よく言われるはぐれ狼あるいは一匹狼）が群れに入り込み、ボスを倒して新しいボスに納まるケースも知られている。また交尾期も例にもれない。このような時は群れの中は騒然となり、狼たちは荒々しく行動する。こんな時に、行きずりの登山者が巻き込まれないという保障はない。交尾期は毎年あり、ボスの交代は数年に一度はあるだろう。

- ② 『急に倒れたり、駆けだしたり、急激な動きをしたり、不意に遭遇したとき』：このような時、狼にとっては人間は単なる物であり、餌に過ぎない。狼は人の存在を素早く察知しその場を去るから、人間との接触はないといわれている。しかし何処までも遠くに行くわけではなく、安全と思われる距離（逃走距離）で相手の出方を見ている。狼のなわばりに人間が侵入するのだから、狼の監視の行き届くところの木立や藪などに身を潜めて、人間を見守っているのは当たり前のことで、ジェヴォーダンの狼公園でも木立の間から人間の様子を窺っているらしく、



さっと振り向くと二、三頭が姿を現し、じっと見つめている。これは野生でも大きな動物公園でも同じではないだろうか。

- ③ 『疫病や戦場での死体や腐肉食い』：これは前に記した通り。現在わが国ではこのようなことはありえないだろうが、遭難した登山者の遺体が雪解けて現れたとき、肉食獣に食われていることがある。その中に狼は含まれていないとは誰が断言できるだろうか。

以上記したことも「特殊事情」ではないだろうか。そうだとすれば、日本オオカミ協会によって現在進められている「国立公園の中に狼を放つ計画」は危険はないといえるのだろうか。狼は仮にも猛獣である。本来はそうした経験者が集まって、この計画を進めるべきではないのかと思う。

誰も考えていなかったこの壮大なドラマ「狼を森に放つ」計画を成功させるためには数多くの英知の集結が必要ではないだろうか。

もしこの計画が実行されたとして、

- (1) その管理態勢をどのように考えているか？
狼を保護している国々の公園などの現状を調査しなければならない。狼の現在地の確認、入念なパトロール、健康状態や採食の状態を調査し、把握しておかなければならない。さらにこの計画が成功したとして、毎年起こることだが、親のナワバリを追われた若い個体は、放浪中に異性と遭遇してカップルを作り、新しい自分たちのナワバリを作る。この繰り返しでうまくいけば、数年後あるいは十数年後には国立公園からはみ出してしまおう。フランスのことだが一九九二年にアルプスの地中海に接する国立公園にイタリアから二頭の狼のカップルが侵入して、あっと言う間に公園内に四群（四〇頭位）になった。さらに増えつづけ、アルプス山脈伝

いに北上し、数年前にはスイスにまで達している。狼は各地で家畜に多くの被害をもたらしながらその領土を広げている。当局は牧羊業者に様々な手当を払っているが、日本よりもはるかに多いハンターがいても、その勢いを阻止することはできないでいる。しかしこうは言っても狼にとってうまくいけばのことで、そのためには様々な障害がある。まず、幼児の死亡率が高いこと、親元から追放された後、放浪中に他の狼に殺されてしまう。この率が最も高いという。

狼の社会は厳しい。さらに病気、思いもよらぬ怪我、ハンターによる射殺、さらに日本の山々にはどこにでも車が走っているから自動車事故で死ぬこともあるだろう。ヨーロッパでは馬鹿にならないという。道路を渡るタイミングが分からないからだ。こうした障害を乗り越えた狼はそうは多くはないかも知れない。しかし狼は遅く我が道を進んで行く。

この協会では国立公園を出た個体は射殺する方針だそうだが事実だろうか。日夜選ばず何時公園のどこから出るとも知れない狼を発見することが出来るのだろうか。また狼ハンターでないハンターが狼を射殺することが出来るのだろうか。その秘策を知りたい。「人間の都合で異国に連れてこれ、都合が悪くなると殺される」というのではあんまりではないか。

- (2) 家畜に被害がでた場合の補償はどうか？

家畜の死は狼によるものか、野犬によるものかの認定する獣医師も必要である。放獣地の周りには羊はいないから問題はないというが、牛牧場がある。そこから美味しそうな臭いが流れてくる。牛やその後産の臭いを嗅ぎつけて放牧場や牛舎を襲うことも考えておかなければならない。よほど厳重にしないと群狼は牛舎に難なく侵入してしまう。小型の狼でも群れになれば大型の牛を襲い傷つけたり、殺すことは難しいことではない。そのような被害の補償、狼の気配に驚いて乳がでなくなった場合の補償など、さらにクリアしなければならない問題が次々とでてくるだろう。放獣に反対する個人や団体にどう対処するか考えておかなければならない。電話や文書による問い合わせ、反対文には速やかに丁寧に応えなければならぬ。多くの人が反対しているのだから、その数は多いと思われる。それは恐らく放獣する直前から盛んになり、裁判沙汰になることもあるだろう。裁判には原告側と被告側から証人が出頭しなければならない。証人は司法や相手方を説得するだけの論理で武装しておかなくてはならない。こう考えてみると、この壮大なプロジェクトには政府が金を出すとしてもかなりの人員が必要で、協会自体ボランティアでない専従研究員が必要になる。協会は単に狼を研究するのではない。「人を襲うことはない」との信念で猛獣と考えられてい

る動物を森に放つのが、それなりの覚悟が一人一人の会員に求められている。

—— 後 記 ——

私は日本オオカミ協会が創立されて以来、昨年まで同協会に所属し、その機関誌『フォレスト・コール』にも関係し、「狼は人間を襲うことはない」とキャンペーンをしてきました。しかし秘かに「本当にそうなのか」との疑念を絶えず抱いていましたが、インドの事件以後特に「やっぱり」という思いが強くなりました。そしてキャンペーンそのものに私も関わっていることが恐ろしくなり、昨年に協会を辞め、このような文章を書くに至ったわけです。私にとって狼は最も好きな動物であることに変わりありません。しかしどのような事情があったとしても「狼が人を襲うことが事実である」ことが分かった

からには「狼は人間を襲うことはない。狼を導入して鹿に荒らされた森林生態系を元に戻す」という協会の趣旨に反することになり、さらに「狼は人間を絶対に（滅多に）襲うことはない」と称して人々に誤解を与えて狼導入を進めようとする協会の姿勢に疑問を感じてしまったからには、もう同協会に留まることは出来ませんでした。そして日頃、私から「狼は人間を襲わない」と聞いて納得して、それを信じてくれた友人・知人たち、さらに私の翻訳本の読者の皆さんに、心からのお詫びの意を込めてこの文を認めた次第です。

本論は『動物文学』平成十四年初冬号に掲載されたものに多少手をいれて再掲載させて頂きました。転載を快諾された平岩由伎子先生に厚くお礼申し上げます。

2003年1月20日

著者の紹介

高橋正男（たかはし まさお）
1929年栃木県に生まれる。

主要訳書

ロビー著
『動物の変わりものたち』1988年 八坂書房
C-C. & G. - ラガッシュ著
『狼と西洋文明』1989年 八坂書房
ダニエル・ベルナル著
『狼と人間』1991年 平凡社
C-C. & G. - ラガッシュ著
『オオカミと神話・伝承』1992年 大修館書店
アベル・シュヴァレイ著
『ジュヴォーダンの人食い狼の謎』1993年 東宣出版
ジェラルド・メナトリー著
『狼—神話から現実へ』1998年 東宣出版

主要著作

『フランス語の動物語彙とその用法』2000年高橋書房
現在 『仏和動物用語・用法辞典』を編纂中

